

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：23302

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24593315

研究課題名(和文)放射線療法中のがん患者へのPILテストを用いた看護介入プログラムの効果

研究課題名(英文)The Effects of nursing interventions based on the Purpose in Life test for patients with cancer undergoing radiation therapy

研究代表者

岩城 直子(IWAKI, NAOKO)

石川県立看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：60468220

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：外来で放射療法中のがん患者へPILテストを用いた看護介入の患者のQOLや心理的適応への効果と放射線部門の医療関係者への効果を検討した。看護介入を受けた患者は、治療経過に伴って絶望感が減少していく傾向と乳がん患者では、QOLとQOLの精神心理面の改善がみられていた。PILテストを手がかりに人生観や病气苦惱観、死生観について対話することは、絶望感軽減に影響を与え、乳がん患者には生活の質と精神心理的な生活の質の改善効果が推察された。また、放射線治療部門の医療者は患者理解の促進や患者への利益を評価する一方で、患者対応への戸惑いがみられていた。それゆえ、チームアプローチが重要であることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study examined in psychological adaptation and QOL of patient the effect of nursing intervention program based on the Japanese Purpose-in-Life (PIL) test for outpatients with cancer undergoing radiation. And, we have also examined the effect of the medical staff. It was suggested that the nursing intervention based on the PIL test might alleviate the sense of despair irrespective of types of cancer. Moreover, this intervention effectively improved QOL and its mental aspects in patients with breast cancer. The opportunity to communicate about ideas on life, views of anguish over disease, and views of life and death alleviated the sense of despair of patients with cancer receiving radiation therapy and improved QOL and its mental and spiritual aspects for patients with breast cancer. While they understood the benefits for patients in the promotion of understanding by the nursing intervention, Confusion to the patient correspondence was observed. Therefore team approach is important.

研究分野：がん看護

キーワード：放射線療法 PILテスト 看護介入 がん患者 チームアプローチ

1. 研究開始当初の背景

平成 18 年にがん対策基本法が制定され、国はがん対策の総合的かつ計画的な推進を図り、罹患率、死亡率の減少に取り組んでいる¹⁾。その中で、放射線療法は、重要な治療法として位置づけられ、身体侵襲の少なさや、治療成績の向上から、外来での治療患者が増加している²⁾³⁾。外来で放射線療法を受ける患者に対して、有害事象の予防や対処へのケアのみならず、精神心理的苦痛を抱えていることが明らかになっており⁴⁻⁷⁾、精神心理的側面についてキャッチし、早期からの支援をしていくことが重要と思われる。しかし、外来で放射線療法を受けるがん患者に対する精神心理的苦痛に対するケアの効果を検討した研究⁸⁾は少ない。

V.E. Frankl の考えに基づいて考案された Purpose in Life test 日本版(以下、PIL テスト)の実施は、じっくりと話しをすることが困難な現状であっても、患者、スタッフ双方にとって、患者の内面に目を向ける機会と枠組みを提供し⁹⁾、実存的評価においても重要な役割を果たす¹⁰⁾。さらに、テストの記載によって自己洞察され、生きる意味を模索するといわれている⁹⁾。よって PIL テストを手がかりに患者の人生観を可視化し、それを基に対話することは、効果的に患者の心と生き方を明らかにするだけでなく、生きる意味をみいだす援助にもなりうると思った。

そこで、本研究では、外来で放射線療法中の患者へ PIL テストを用いた看護介入プログラムを実施し、患者の精神心理的側面への有効性と、看護介入によって得られた患者の全体像の結果を他の専門職と情報共有することの放射線部門の医療関係者への効果について検討したいと考えた。

2. 研究の目的

外来で放射線治療中のがん患者に PIL テ

ストを用いた看護介入プログラムを実施することで、1)患者の QOL やがんに対する心理的適応への効果と、2)患者を支援していく上での専門職にどのような効果があったのかを明らかにする。

3. 研究の方法

《研究 1》外来で放射線療法を受けるがん患者への PIL テストを手がかりとした看護介入の効果

1) 期間：平成 24 年 8 月～平成 26 年 2 月

2) 研究対象：A 病院において 会話が可能で、医師より病名・病状の告知がされている、はじめて放射線療法を受けるがん患者を介入群・対照群に無作為に振り分け、研究対象者とする。

3) 介入群への看護介入プログラム：放射線療法開始時に PIL テストを実施し、1 週間後に、PIL テストに記述された内容を手がかりに「人生観」、「病気・苦悩観」、「死生観」、「自殺観」について、研究者と対話し、自由に語ってもらう。面接時間は 30 分を目安とする。

4) 介入効果の評価：全対象者への Quality of Life Radiation Therapy Instrument 日本語版¹¹⁾(以下 QOL - RTI)、Mental Adjustment to Cancer 日本語版¹²⁻¹³⁾(以下、MAC)の質問紙の記載と、介入群への半構造化面接で行なう。

5) データ収集方法

放射線治療部門の医師に紹介された患者に、研究者が口頭と文書で研究の説明を行ない、研究参加の同意を得たのち、質問紙調査を実施する。調査は 3 時点(放射線療法開始時、終了時、終了 3 ヶ月後)で行なう。基本属性はフェイスシートおよびカルテより収集する。PIL テストを手がかりとした看護介入の感想について、放射線療法終了 3 ヶ月後に半構造化面接を実施する。

6) 分析方法

両群の基本属性の等質性は独立した t 検定および χ^2 検定を行なう。QOL-RTI 日本語版、MAC 日本語版については、独立変数を介入有(以下、介入群)・無(以下、対照群)の 2 群(対応なし)と、放射線療法開始時・放射線療法終了時・放射線療法終了 3 ヶ月後の時期(対応あり)の 2 要因分散分析(混合計画)を行なう。

介入群への放射線療法終了 3 ヶ月後の面接調査のインタビュー内容は、質的帰納的に分析し、カテゴリー化する。

《研究 2》患者の全体像の情報共有が放射線治療部門医療関係者にもたらす効果

- 1) 期間：平成 24 年 8 月～平成 25 年 9 月
- 2) 研究対象：A 病院放射線治療部門医療関係者とする。
- 3) データ収集方法

研究者は、放射線治療部門の医療関係者合同カンファレンスに参加し、看護介入によって得られた患者の全体像について情報共有し、全介入終了後、放射線治療部門医療関係者にグループインタビューを行う。

4) 分析方法

逐語録を基に質的帰納的に分析し、カテゴリー化する。

【倫理的配慮】石川県立看護大学倫理委員会および調査施設の倫理委員会の承認を得て行なった。

4 . 研究成果

《研究 1 》

1) 対象者の概要

対照群 20 名、介入群 19 名を分析対象とした。(回収率 95%、有効回答率 85～100%)。平均年齢は、対照群 62.6 ± 12.3 歳、介入群 56.8 ± 13.2 歳であった。対照群、介入群で年齢、照射量、性別、職業、婚姻、子ども、居住形態、疾患、病期に偏りはなかった。対照群、介入群ともに、乳がんが最も多く

(65.0%、58.0%)、乳がん患者の平均年齢は、対照群 57.5 ± 11.6 歳、介入群 49.2 ± 9.7 歳であり、介入群の平均年齢が若い傾向にあった($P < 0.10$)。その他のがん患者の平均年齢は 69.5 ± 8.8 歳で、乳がん患者が有意に若かった($P < 0.01$)。病期では、対照群では 0～ 期までが 95%で、介入群は 0～ 期が 74%、 期が 26%であった。PS は放射線療法開始時から、放射線療法終了時まで全員グレード 0～1 であった。

2) QOL と心理的適応への効果

全対象者では、MAC の下位概念である Helpless/Hopeless(絶望感)の交互作用に有意傾向が認められ($p < .10$) 図 1、介入群は、放射線療法開始時から経過に伴って絶望感が減少していく傾向がみられた。QOL - RTI には有意な交互作用は認めなかった。今回の対象者で 60%を占めていた乳がん患者をみると、QOL の総得点と QOL 心理/精神得点において、交互作用に有意差が認められ($p < .05$) 図 2、図 3、介入群において、放射線療法開始時から時期の経過に伴って、QOL と QOL の精神心理面の改善がみられていた。

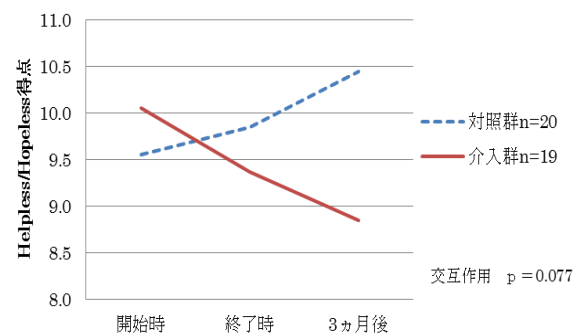


図1 全対象者のHelpless/Hopeless得点

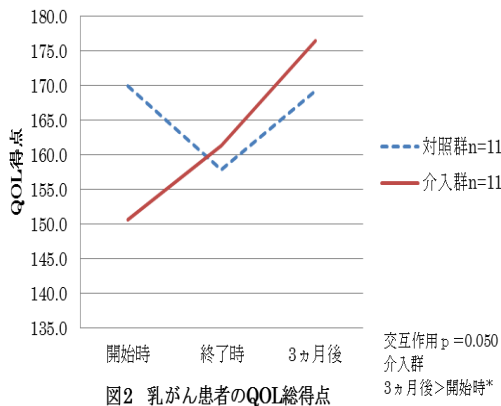


図2 乳がん患者のQOL総得点

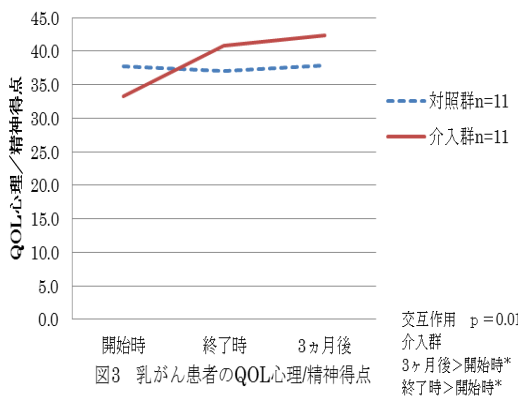


図3 乳がん患者のQOL心理/精神得点

3 介入群の放射線療法終了3ヶ月後の面接の結果

【 】はカテゴリーを示す。

対象者は16名（男性3名、女性13名）で、面接時間は平均22.8分であった。PILテストを手がかりとした看護介入に対して患者は、【自己洞察の機会】【病気の自覚】【語ることで楽になる】【目標を意識する機会】【質問内容の意外性】と評価していた。

4) 考察

放射線療法中の外来患者にPILテストを用いた看護介入を試みた結果、がん腫に関わらず、絶望感が軽減する可能性が示唆された。PILテストの、今この状況をどう生きるかという問いかけに答え、さらに、研究者と対話を持ったことが、放射線療法を受けなければならないという不可避な状況の中で、自分がなすべきことの答えを出す機会となった。それが問いの観点変更のきっかけになり、絶望感の軽減に影響があったものと推察される。また、乳がん患者に、QOLとQOLの精神的側面の改善に有効であ

ることが示唆された。その理由として、今回の介入群の平均年齢が、 49.2 ± 9.7 歳と他の全がん対象者に比べ、有意に若いことの影響が考えられた。乳がんは、「母親として生きること」や「社会復帰を望む」¹⁴⁾という使命感をもった、そして、多様な役割を担う45-50歳の若い年代で好発する¹⁵⁾。そのため、本看護介入によって、「誰か」あるいは「何か(何かの課題が)」といった自分のなすべきことへの答えが出たことが、精神的安定につながっていったのではないかと考えられる。さらに、看護介入が、【自己洞察の機会】【病気の自覚】【目標を意識する機会】と評価されていたことから、生きる意味や病気の意味を見出す支援になっていたことが推察された。

《研究2》

患者の全体像の情報共有が放射線治療部門医療関係者にもたらす効果

1) 対象者の概要

対象者は8名（医師2名、診療放射線技師5名、看護師1名）で、男性が7名、女性は1名、年齢は、20歳代1名、30歳代1名、40歳代4名、50歳代2名であった。

2) 患者の全体像の情報共有に対する放射線治療部門医療関係者の評価

【 】はカテゴリー〔 〕はコードを示す。

カンファレンス参加者から【患者理解の促進】、【患者対応への利益】、【いつもの態度で接する】、【テスト結果に無関心】、【患者への否定的効果を心配】、【患者対応への戸惑い】の意見がみられた。

3) 考察

患者の全体像の情報共有に対する評価内容から、診療場面においては【患者理解を促進】し、【患者対応への利益】に至っていた。一方、〔実際の治療では先入観も飛んでいつもと同じような接し方〕で対応していたが、【患者対応への戸惑い】もみられた。

質の高い緩和ケアを目指すためには看護の力を発揮させることが求められている¹⁷⁾。放射線治療部門で、患者が、精神心理的苦痛に対する心のケアを含めた全人的ケアを受けられるようそれぞれの専門性を発揮し、チームでアプローチしていくために、看護師が、患者の精神心理的援助を担い、それを他職種と情報共有していくというチーム医療の重要性が示唆された。

まとめ

外来で放射線療法を受ける患者と研究者が、人生観や病気苦悩観、死生観について対話するという相互作用の機会を持ったことで、絶望感軽減に影響を与え、乳がん患者にはQOLとQOLの精神心理面の改善効果が推察された。また、放射線治療部門において、精神心理的援助を看護師が担い、それを多職種と情報共有していくというそれぞれの専門性を発揮したチームアプローチの方法が示唆された。

今後の課題

症例数を増やし、絶望感の軽減への有効性、乳がん患者に対する有効性について更なる検討が必要である。また、PILテストの質問項目は、直接的に生きがい、死生観、病気苦悩観、自殺観について問いかけており、自我侵襲的な側面を持つ⁹⁾。そのため、対話において、経験や教育、訓練をして看護師が聞く準備をする必要があり、さらに、放射線治療部門で看護師がPILテストを手がかりとした援助を容易にするために、質問内容の検討やどのような方法で行うことが適切かを検討していく必要がある。

引用文献

- 1) 厚生労働省：がん対策推進基本計画．http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/dl/gan_keikaku02.pdf．1-36(2014.09.03 参照)
- 2) 濱口恵子編集：がん放射線療法ケアガイド． - ，中山書店，東京，2009．
- 3) 宮坂和夫編集：放射線科エキスパートナーシング．序，南江堂，東京，2005．
- 4) 森本悦子，佐藤禮子：放射線療法を受けるがん患者の構えに関する研究．日本がん看護学会誌，14(1)，45-52，2000．
- 5) 矢野久美，増山純二：外来放射線治療患者への看護の課題 外来通院にて放射線治療を受ける患者の問題点を調査して．長崎県看護学会誌，5(1)，57-63，2008．
- 6) 赤石三佐代，石田順子，石田和子：放射線治療経過に伴う乳がん患者の気持ちの変化．The Kitakanto Medical Journal 55(2)，105-113，2005．
- 7) 赤石三佐代，布施裕子，神田清子：初めて放射線治療を受けるがん患者の気持ちとストレス対処行動に関する質的研究．群馬保健学紀要，25，77-84，2005．18)
- 8) Gümüs A. B.，Çam O.：Effects of emotional support-focused nursing interventions on the psychosocial adjustment of breast cancer patients Asian Pacific Journal of Cancer Prevention，9(4)，691-697，2008．
- 9) 佐藤文子監修：PILハンドブック[改訂版]：田多香代子執筆，第 部 第2章透析患者のPILテスト．79-94，システムパブリカ，東京，2008．
- 10) 佐藤文子監修：PILハンドブック[改訂版]：黒丸尊治執筆，第 部 第1章PILテストから見た心身症患者の検討 67-77，システムパブリカ，東京，2008．
- 11) 佐々木武仁：放射線治療におけるQOL評価法の確立に関する研究(最終報告) 頭頸部腫瘍について．日本放射線腫瘍学会誌，14(3)，181-184，2002．

12) 明智龍男,久賀谷亮,岡村仁他:Mental Adjustment to Cancer (MAC) scale 日本語版の信頼性・妥当性の検討. 精神科治療学, 12(9), 1065-1071, 1997.

13) Akechi T., Fukue-Saeki M., Kugaya A., et al: Psychometric properties of the Japanese version of the Mental Adjustment to Cancer (MAC) scale. Psychooncology, 9(5), 395-401, 2000.

14) 妹尾 未妃: 中年期乳がん患者の乳がん罹患後の人生の希望と不安 家族や同病者、重要他者からのサポートとの関連について. 母性衛生, 50 (2), 334-342, 2009.

15) がん研究振興財団がんの統計'13 http://ganjoho.jp/data/professional/statistics/backnumber/2013/cancer_statistics_2013.pdf, 15-16. (参照 2014-09-04)

16) 吉田香里: 第 部各論-1 技法の各種口ゴセラピー. 精神科治療学, 24 増刊号, 64-65, 2009.

17) がん医療に携わる看護研修事業特別委員会: 看護師に対する緩和ケア教育テキスト, 小松浩子執筆, 2 基本的緩和ケアを担う看護師に求められる役割と必要な実践能力. 6-11, 日本看護協会, 東京, 2013.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

岩城 直子・牧野 智恵・加藤 亜妃子・木村 久恵・浅見 美千江・木村 美代、石川県内のがん療養者の在宅緩和ケアに携わる看護師の求める教育支援 ケアの実施状況とその困難感、学習ニーズの分析から. 石川看護雑誌, 9, 71-80, 2012.

[学会発表](計3件)

岩城直子・牧野智恵・小竹佳津子・江川真紀子・酒井裕美、放射線療法中のがん患者へのPILテストを用いた看護介入の効果の検討. 第29回日本がん看護学会学術集会, 2015年2月, 横浜国際会議場(神奈川)

岩城 直子・牧野 智恵・小竹 佳津子・江川 真紀子・酒井 裕美・大井 きよみ・尾川 洋子、放射線療法中のがん患者へのPILテストを用いた看護介入の有効性の検討. 第28回日本がん看護学会学術集会, 2014年2月, 朱鷺メッセ(新潟)

TOMOE MAKINO・NAOKO IWAKI

“The ‘Meaning of Life’ of Patients Undergoing Outpatient Chemotherapy: from the Analysis of PIL Tests.” 17th International Conference on Cancer Nursing, 2012, Prague.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩城直子 (IWAKI NAOKO)
石川県立看護大学・看護学部・准教授
研究者番号: 60468220

(2) 研究分担者

牧野智恵 (MAKINO TOMOE)
石川県立看護大学・看護学部・教授
研究者番号: 60161999